

＜ 今日の説教のポイント ヨナ書4章 ＞

ヨナは私たち自身！ そのヨナに対して下さる神様はどんな方？

1 不満、怒り、死ぬ方がまし — ヨナを描写する頻出語が持つ意味。

1~2章の体験を経て、神様に赦されて生かされていることを悟り、命も惜しまず神様に仕える者となったヨナ。そのヨナが神様に対して不満を覚え(1,6)、怒り(1,4,9)、挙句の果てに「死ぬ方がまし」(3,8,9)とふてくされたことに驚かされます。ここを読んでいると、理由は何であれ、このような姿を取ること自体に恥ずかしさを覚えて来て、ヨナを見ていられなくなってきました。しかし、そこで気づかされます、自分も同じような姿を取っているのではないか、しかも信仰者となつてからも、と。あることについて絶対自分が正しいと思う時に不満や怒りが生じ、しかもそれは当然だと思ふ。ヨナの場合もそうなのではないでしょうか。しかし、聖書のこの物語は「それは当然ではない。不満、怒り、ふてくされる姿は醜い。いいことなんて一つもないからやめなさい」と教えてくれているのです。では、神様に立ち帰ったヨナがなぜこうなってしまったのでしょうか？ 何を忘れたのでしょうか？ 神様はヨナにどう向かわれたのでしょうか？

2 ヨナの分かること(2)と神様が考えて下さっていることの違い。

神様はヨナをしたいようにさせられます。しかし、その中でヨナが自分のしたことや言ったことの愚かさに気づくように企てて導かれます(5-9)。この辺も読んでいて、「自分にも神様はこうして下さっているのだろうか」と思われます。そしてついに神様は語られます、御自分にとってニネベの人々も大事な存在なのだ(10-11)。ヨナは多くの国の人々、そして神の民も苦しめるニネベの人々を赦せなかったのです。これだけは赦せない、赦してはならないと確信していたのです。しかし、それを正しとするなら、自分は真っ先に神様に裁かれるべき存在であることは抜けているのです(Iテモテ 1:12-17)。今赦され、生かされていることを忘れていたのです。ペトロもパウロもアウグスチヌスもルターも皆そのことを気づかされ、この隣み深い神様を自分の人生の中心に置いて生きるようになったのです。この聖書の神様がそのことを私たちに気づかせるために特にお与え下さったのが御子イエス・キリストなのです。来週からこの方を追って行きます。